生活文化編

ようめし（夕飯）。
よういくる（食欲旺盛＝飲食物がよく入る）。
おみい（雑炊＝おじや）御飯の残ったたぁおみいにしとこう。
ひぐれさぐれ（日暮れどきの忙しい時）ひぐれさぐれなんごとしよるかぁ。
ひしてぇ（一日）昔の百姓はひしてぇに四へん飯食べよったもんなぁ。
ゆうべ・ようべ（昨夕・昨晩。標準語は日暮れてしばらくの間）。
よさり（夜）。
よざるき（夜間外出）。
あすなさ（明日の朝）。

五　気象に関する方言

寒のしまった（寒さがきびしくなった）寒のしまりましたなぁ。
温うなった（暖かくなった）このごらぁ温うなりましたなぁ。
ようなった（凌ぎ易くなった）このごらぁようなりましたなぁ。
よう続く（続き過ぎる）一雨欲しかとぃよう続きますなぁ。
よか潤い（慈雨）昨日の雨ぁなんとよか潤いやったからすなぁ。
潤いまんぐり（農作業と雨の時期・雨量）上等の潤いまんぐり。
もうらしか（湿度の高い雨の予感）えらいもうらしからすなぁ。
もす（蒸す・温度湿度が高い・むしむしする）もしますなぁ。
ほめく（暑い）毎日のようほめくことらすなぁ。
はや・はやの風（はえ＝南風）はやぃなったけん明日ぁ雨ばい。
しらはや（梅雨明け後の何日も続く南風＝気温が高く風は強い）。
ごとくい風（前行の白南風の別名＝米を五斗喰う期間吹く風）。
たつみばや（南東風＝辰巳の方角の風）たつみばやぁこたゆるなぁ。
あなぜ（西北風）あなぜのごたるけん用心しとこう。
照り（日照り＝夏の晴天）毎日よう照りますなぁ・照りの続く。
にわはわき（通り雨・庭掃きに埃が立たぬ程度の雨）
とうれん（霧）とうれんのかけて高速道路ぁ通れんやった。
はげあめ（梅雨末期の豪雨）はげあめで梅雨も明けた。
あかみず（洪水）あかみずの出るくらい降っとかにゃ夏が心配。
かんやい（寒さ加減）かんやいのようなりましたなぁ。
こっけ霜（厳しい霜）今朝ぁえぇらいこっけ霜やったばい。
霜あげ（霜の後に降る雨）今夜から霜あげぃなるばい。
寒じる（凍結する・気温が下がって道路や田畑の土が凍る）。
こいか（雨の後田畑の土が水を含み過ぎ農作業不能の状態）。

六　地域（志摩）の農耕の一年から

福入り（一月二日の朝に食べる餅の入った雑炊）。
ないぞめ（一月二日年初めの縄綯い・藁仕事初め＝儀礼的作業）。
○○ぞめ（ないぞめに準えて他の農作業の仕事初めをも言う）。
あるき（嫁や奉公人を休ませ実家にやる）里いあるいとる。
ほうげんぎょう（一月七日朝　魔除け行事＝村の入り口で火を焚く）。
もうぐら打ち（一月十四日もぐらの被害を防ぐ藁束で地を叩く）。
力餅（一月十五日餅の入った御飯を食べる）力餅食べ力持ちなれ。
歳とり直し（厄年や十九・二十九等九のつく歳にする正月の接待）。
お茶わかす（席を設け知人を接待する＝親睦・謝恩・厄払い等意図）。

四月五月（旧暦四月＝裏作の取り入れ・五月＝田植えを合せた農繁期）。
螟虫とり（螟虫＝ずいむしの卵・幼虫を一つ一つ手でとり除く）。
灯りつけ（螟虫の産卵期成虫を誘蛾灯で集殺する灯火の点火作業）。
わさ植え（田植えを始める日の行事）わさ植ぇ日の良か日ぃした。
さなぼり（田植えが終わった日の祝い）さなぼりごっつぉだす。
なりあがる（田植えが終わって体を洗い家に上がったり、下駄を履く）。
田植えびけ（田植えのための学校の休み）田植えびけぁ親も嬉しか。
縄はり（田植え綱を張る作業）縄はりゃ子どもの仕事ぃ上等やもん。
よこい（憩い＝田植え後村中が仕事を休み、客を招き御馳走する日）。
つくりあがり（田植え後十日間程の作為的農閑期）。
秋（稲刈り・稲の収穫作業の農繁期）早良秋ぃ行とんなる。
鎌上げ・庭上げ（稲刈り終わり・脱穀終わりの祝宴・鎌を納める）。
かまもち・ぼたもち（おはぎ）さなぼり、かまあげなどの時の御馳走。
じんじ・おくんち（神事・お宮日＝氏神様の秋の大祭・豊年感謝祭）。
みやざ・二番じんじ（神に感謝と地域住民同士の感謝親睦の祭）。

七　消え行く農具とその方言名

こえたご（肥桶＝液肥を入れる・運ぶ桶）一日中こえたご担いだ。
いない棒（天秤棒＝肩を支点に前後に肥桶等をつるして運ぶ棒）。
おおく（両端を尖らせ藁・草・薪の束を突き刺して運ぶ棒）。
なかづり棒（中ほどに荷をつるし棒の両端を二人で担ぐ運搬棒）。
すご（ふご＝藁製の運搬用容器で天秤棒で担ぐ二個一組紐付）。
かるいすご（ランドセル式の背負い式ふご）。
めご（竹で編んだ運搬用の容器＝担いで運ぶ、車に積載用等）。
しょうけ（笊＝めごより小型で細く編んだ竹製容器）。
みい（箕＝収穫穀類の選別機）とうみい（唐箕）てみい（手箕）。
とうみいじょうけ（唐箕用の笊）御飯じょうけ（竹製御飯容器）。
斗桝（一斗、一八リットルを測る桝）籾摺りぁ斗桝の要るぞ。
とかき（量を測る桝の口の上縁に沿い掻き落とす規定棒）。
ちきり（秤・棹秤）ちきりぃかけるけん升目ぁ大概でよか。
かまぎ（叺＝莚を縫い合わせ袋状にした米の出荷容器）。
たあら（俵＝菰を綴じて作った米・穀類・芋類の輸送貯蔵容器）。
とうまいぶくろ（唐米袋＝麻袋＝穀類や糟糠類の容器）。
あしなか（足半＝藁で編んだかかとを出す作業用の草履）。
しゃりき（車力＝荷車運送業）。
うんてん（牛馬に曳かせ、方向変換用の前車を装置した荷車）。
すら（牛馬に曳かせる橇＝車の通れぬ所の運搬に使う）。
もんばこ（籾箱＝収穫した籾を入れ、貯蔵し時々出して干す）。
よこづち（藁打ち用の木槌で、横の面で藁を叩く）。
じゅうかよう（重荷用自転車）じゅうかようは百キログらいぁ積みよった。
※ここでは農耕牛馬に直接関わる農具を省く

※第四章・第一節・三　日本の国語と志摩の方言（抜粋）

生活文化編　全197頁

『新修志摩町史』各編の中で、もっともバラエティーに富んでいるのが、生活文化編です。各執筆者の三年間にわたる調査の結晶ともいえます。女性史にはじまり、地名、伝説、方言、民俗、芸術家と六つの章にわたり、志摩町民の生活文化を紹介します。

民俗調査では、西南学院大学の協力を得て、町内33地区の446名の方々から様々な民俗事象を聞き取り調査し、詳細にまとめていただきました。また、志摩町の魅力のひとつとなった芸術活動については、町内にアトリエを開設する40人を紹介しています。

一方、志摩町の方言は、博多弁に近いものがありますが、厳密には微妙に違いがあり、志摩町域でしか使われていない心に響くことばがたくさんあります。

生活文化編　執筆者紹介

石井　忠	（古賀市立歴史資料館館長）
伊藤　和雅	（元西南学院大学非常勤講師）
大部　志保	（西南学院大学大学院国際文化研究科研究生）
進藤　嘉和	（元志摩町社会福祉協議会会長）
末松　壽子	（志摩町議会議員）
武野　要子	（福岡大学名誉教授）
西崎ミサヲ	（町内協力者）
深尾　清造	（九州大学名誉教授）
丸山　雍成	（九州大学名誉教授）
溝口ヒサエ	（町内協力者）
山北トキヨ	（町内協力者）
吉田扶希子	（西南学院大学非常勤講師）
吉塚　勇雄	（元志摩町教育委員会委員長）